大英博物館所蔵不空羂索観音二神将像試論
―図像と制作背景―

神戸大学 古川 攝一
FURUKAWA Shoichi

大英博物館が所蔵する「不空羂索観音二神将像」（以下、本図と略記する）は、平安時代末期から鎌倉時代初めにかけての南都における、復古的な機運の中で制作された絵画の一遺例として、また在外仏画の優品として有名である。画面中央に、岩上の蓮華座に坐す三面四臂の不空羂索観音が描かれ、その前部に執金剛神と毘沙門天の立像が脇侍のように配されている。本図についての研究は図版解説が中心であり、未だ本格的な考察はなされていない。先行研究を概観すると、三尊の図像は、不空羂索観音が現図胎蔵界曼荼羅蓮華部院に描かれる図像を、執金剛神は現在東大寺法華堂に安置される秘仏の塑像を、毘沙門天は天平勝宝 7 年（755）に戒壇院に安置されたとされる華厳経厨子に描かれた四天王像を、それぞれ典拠としているとされる。そして、南都の教学復興を背景とした 12 世紀末から 13 世紀初め頃の仏画であると位置づけられている。

本発表では、諸先学の研究成果から得られた論点に基づき、教学復興と漠然と指摘される制作背景について考察し、絵画史上の位置づけを試みるものである。

本図の主題を考える上で注目したのが、『東大寺要録』をはじめとする、12 世紀の諸記録である。それらの記述から、不空羂索観音・執金剛神・毘沙門天は、それぞれ良弁（689～773）に縁のある図像であるといえる。さらに、本図の図様と東大寺法華堂との関連に着目し、天平 18 年（746）3 月に良弁により始修され、連綿と行われた東大寺法華会を本図制作の直接的な動機であると考える。

東大寺法華会は遅くとも 9 世紀後半には、当初の教学研鑽という目的から良弁の追善供養へと、その比重を移したのである。さらに、法会の開催月も 3 月から良弁忌を意識して 12 月を中心とした冬期に行われるようになった。つまり、平安時代の法華会は、同時代の貴顕の間で流行した法華八講・法華十講と変わらない内容の法会であったのである。この傾向は 13 世紀初頭においても大きく変化しなかった。

法華講は亡者の周忌法会として宮中で盛んに行われた。法会では本尊として、亡者が生前帰依していた仏が選ばれた。経典に基づいたものではなく、供養される者が生前に信仰していた仏を組み合わせた仏画が用いられたこともあった。

従って、本図は東大寺における法華講である、良弁の追善供養を目的とした法華会に、治承兵火後のある段階で、良弁を私淑し、奈良朝の仏教に対する復古精神を持った高僧により施入されたものと考える。

12 世紀末の東大寺において、教学復興についての具体的な事績が窺え、本図の制作を指導できると考えられるのが、尊勝院の弁暁（1139～1202）である。彼は良弁在世時の東大寺への復古意識を持ち、良弁を私淑していたことが史料から窺える。よって、本図は弁暁が活躍した建久年間（1190～1198）に制作されたものと結論づけたい。